

ベトナムの子どもを支援する会 (SVCA) の 国際保健福祉活動に参加して

郷間 英世 幸福 秀和 郷間 安美子

International Health and Welfare Activities in Vietnam

Hideyo Goma, Hidekazu Kofuku, Amiko Goma

ベトナムの子どもを支援する会 (SVCA) の 国際保健福祉活動に参加して

郷間 英世^{*1} 幸福 秀和^{*1} 郷間 安美子^{*2}

International Health and Welfare Activities in Vietnam

Hideyo Goma^{*1}, Hidekazu Kofuku^{*1}, Amiko Goma^{*2}

要旨

2017年8月1～5日に「ベトナムの子どもたちを支援する会：Support of Vietnam Children Association (SVCA)」の国際保健福祉活動に参加した。SVCAは、27年にわたりベトナムのベンチェ省の行政と協働し、地域に根ざしたりハビリテーションであるCBRを基本とした活動を行ってきた我が国のNGO団体である。SVCA活動の全体は多岐にわたるが、本稿では、筆者らが関わった、障害児の家庭訪問支援、リハビリ病院での研修と指導、発達障害についての研修会と発達検査、障がい児学校でのお祭りなどについて紹介する。

キーワード：ベトナムの子どもたちを支援する会 (SVCA)、障害児、国際保健福祉活動、
地域に根ざしたりハビリテーション (CBR)

1. SVCAの活動

2017年8月1日～5日に「ベトナムの子どもたちを支援する会^[1]：Support of Vietnam Children Association (以下SVCAと略する)の活動に参加した。

SVCAは1990年に設立され、これまで27年にわたり、毎年ベトナムのベンチェ (Ben Tre) 省 (日本の都道府県に相当する自治体) において活動を行ってきたわが国のNGO (non-governmental organization) 団体である。板東あけみ氏を中心に事業計画を立て、ベンチェ省の行政機関である人民委員会や保健局・教育研修局と協働しながら国際保健福祉活動を行ってきた。これまで行ってきた主な事業の内容は、1) ベトナムの医療情勢に合わせた母子健康手帳の作成と普及、2) 地域の障害児の家庭訪問指導を行うなど Community Based Rehabilitation (地域に根ざしたりハビリテーション、以下CBRと略する) 活動の推進、3) リハビリテーション病院における指導や助言、4) 障害児のためのサポートセンターの建設、5) 医療や教育・福祉関係者への研修などを通じた情報や支援方

法の提供などである。



図1. 障害者サポートセンターのプレイルーム

今回のSVCAの活動に参加したのは、医師5人、理学療法士6人、作業療法士3人、言語聴覚士2人、看護師6人、義肢装具士1人、教員や心理士4人、小学生4人、その他の人々が日本各地から参集し、ベトナムでJICAの活動をしている日本人4人を加えると総勢45名であった。さらに、現地ではベトナム語の通訳やベトナム人専門家など5人も加わった。活動の全体は多岐にわたるが、本稿では筆者らが関わった、家庭訪問、リハビリ病院での研修と指導、障害についての研修会と発達検査、障がい児学校 (学校の場合はこの表現が用いられている。以下同じ) でのお祭りに

*1：姫路大学看護学部

*1：Himeji University School of Nursing

*2：京都国際社会福祉センター

*2：Kyoto International Social Welfare Exchange Centre

ついて主に報告する。

2. ベンチェ省

ベンチェ省は、人口 1,000 万人の巨大都市ホーチミンから南へ車で 1 時間半ほどの、メコン川の河口にある人口 160 万人ほどの省（日本の県）である。およそ 3 つの三角州から構成され、ココナツの森林におおわれた土地で農業が盛んであり、特に果樹園や水田が多い。また、淡水魚・海老などの水産物が豊富で、観光客にはシーフードが人気である。また、ベトナム戦争の時には先頭に立って戦い、枯葉剤により大きな被害を受けた地域のひとつである。バスでベンチェに向かう途中、田んぼの中あちこちに墓標が立っていて、尋ねるとベトナムでは自宅等でなくなった場合は、昔からの墓地に葬られるが、戦闘や戦争でたおれた場合はその場所に墓標を作るのだという。



図2. メコン川の朝日

訪問した時期は雨季で、ほぼ毎日午後になると夕立のような集中豪雨があったが、30 分ほどで止んでしまう。また、蚊を媒介としたデング熱も多く、日本から出かけた我々は、長袖長ズボンで、虫除けスプレーが欠かせなかった。

3. 現地での活動

3.1 障害児の家庭訪問

ベトナムではさまざまな理由で、保育園や学校に行っていない障害児がいる。SVCA では以前より医師、理学療法士、教員などによる専門職チームを作り、家庭を訪問し、子どもの医療的・発達の状況をつかみ生活上の困難を知ることで、現状に即した有用なアドバイスをやってきた。その際、現地の教師や CBR 担

当の支援者にも同行してもらい、家族や子どもとの直接的なやりとりをお願いし、我々の訪問が今後の現地の支援者にとっても意味あるものになるようにしている。

今回、SVCA のメンバーは 5 班に分かれ現地のスタッフも加わり、計 18 人の障害児の家庭に出向いて相談や指導を行った。子どもの障害はダウン症、知的障害、自閉症、口唇口蓋裂、水頭症、脳性麻痺、てんかんなどであった。

以下、訪問の実際を報告する。

水頭症の例では、省立病院の理学療法士および地域の CBR 担当の支援者が同行し、案内役をした。まず、現地の理学療法士が家族に状態を聞きながら手技を行った後、SVCA の医師の診察、理学療法、作業療法のセラピーの方法へと展開し、看護支援、教育福祉的観点の支援へと進んでいった。

何人かの例で共通したのは、家族が農村地帯に住んでいて、地域の病院を利用する際の移動手段に難渋しているため、きめ細かい医療のサービスを継続して受けることが難しいという点であった。しかし、地域の CBR 担当の支援者は無給でありながら熱心であった。今回の我々の訪問を機に、ボランティア対象の研修会も行われており、参加者の熱心な学びを身近に感じた。ただ、リハビリテーションは効果が見えにくく長期にわたるために、モチベーションを維持していくのが難しいとの現地職員からの説明もあった。しかしながら、我々の訪問もその維持には役立っているのではないかと感じられた。

また、多くの例で、家族の支援、特に祖母が熱心に関わり、子育ての経験を活かした役割が大きいように思われた。それは、ベトナムの家族制度の在り方からくるのか、伝統的な保護的な子育てのせいなのかはともかく、障害のある子どもの支援に活かされているように思えた。それ加えて、省立病院や日本からの専門的なアドバイスは有用と思われたが、総じて地域に根ざした方法で展開されていた。療育に際してはコストの問題はあるが、家族や現地スタッフのありようから徐々に構築することは可能であると感じ取れ CBR 担当者の役割を明確にする機会になったと思われた。

知的障害と自閉症スペクトラムを併せ持つ例では、子どもを含めた SVCA のグループに、ベンチェの支援学校教員が加わった。車の入れないジャングルの中に集落があり、経済状況はかなり厳しい様子だった。子どもは、学校に在籍したことはあるが、問題行動のため現在はやめているという。家族が困っていることは、パニックを起こすと母や祖母に暴力をふるうこと、一人で家におけないので祖母が家でみているが何をしたらいいかわからない、遊ぶ友達がいない等であった。

そこで、通訳を通して発達のアセスメントを行うと3歳前後の発達段階は超えてきていることが確かめられ、また、日本からの2人の小学生とシャボン玉・水鉄砲等で一緒に楽しそうに遊ぶ様子も見られた。そこで、保護者に対し発達に合ったかわりが必要であり、米をとぐとか野菜をちぎるなど家族の中での役割意識を育てることも大切と伝え、ほめてもらえる経験をすることは精神的な安定にも役立ち、児の社会性を育てるのに有用であることをアドバイスした。元気で学校に行けたら、というのが母の望みではあるが、障がい児学校は遠く、寮に入らないといけないので一人で預けることには不安が強く踏み切れない現状があった。

何人かの子どもの家庭訪問の後のSVCAの話し合いの中では、障害のある子どもの発達特性や発達段階にあった関わりや支援が必要との意見が出され、アセスメントの方法を伝えていくことも今後の課題と思われた。また、保護者同士話し合いの場を作ることの必要性も挙げられた。そして、地方に住む人々にとっては省に一つしかない障がい児学校は遠く、地域の学校以外の選択肢がないため、CBRの活用やコミュニティセンターの支援を充実させる必要があるとの意見が出された。

3.2 リハビリ病院での研修と指導

ベンチェの病院において、リハビリテーションについての研修および病院スタッフとSVCAとの共同で行われた事例検討会に参加した。当日は、現地の理学療法士が最初にデモンストレーションを行った。伝統的な整形外科的アプローチで、身体的機能に着目した方法で、ベテランらしく丁寧に実践していた。実施に際し大きな問題はないが、神経発達学的なアプローチ法の視点が不足していると感じられた。引き続きSVCAの医師の診察後に日本の理学療法士が神経発達学的視点から感覚入力と運動との関係についてアプローチし、本人の持っている活動性を引き出し四肢体幹をリラックスさせた。また、作業療法士が上肢のコントロールを導き出すことや顔面や頭部、体幹等を触れることによりボディイメージ構築に関与していく等の説明を行った。現地の理学療法士のアプローチは、課題克服のための指示的訓練であるため、子どもは受け身的であったが、神経発達学的アプローチでは、子どもの主体的な活動から次第に笑顔が見られて活動性も高まっていく様子がみられた。手指も把握状態から開きながら把持の要素が出始めた。

次いで、低酸素性脳症を呈した例の検討がなされた。全般的なリハビリテーション対応、すなわち残存機能と損傷された機能の観点からのアプローチが合わせて必要と考えられる例であった。現地の理学療法士

からの説明とデモンストレーションの後、SVCAの医師の診察が行われた。現地の理学療法士は、脳性麻痺の痙直麻痺のタイプに対するアプローチを行っていたが、セラピスト主体の方法であり、子ども自身がなかなか受容できない場面があった。概観すると、子どもは脳基底核周囲の障害を思わせる不随意運動もしくは運動失調様の動きを呈していて、一見痙直型を思わせる下腿と左上肢の硬さが問題となっていた。それに対し、体幹と上下肢の姿勢保持と制御、および運動企画のために筋緊張を亢進させているのではないかと仮説を立て、本人に取れる座位姿勢でリラックスさせ下肢と上肢コントロールを促すと、次第に自分で上肢のコントロールが増し、徐々に機能の改善を示唆できた。感覚・運動系に働きかけることで、姿勢制御されることを現地にスタッフに説明し、理解してもらうことができた。

3.3 障害児理解の研修と発達検査の紹介

SVCAがベンチェで活動した8月1～4日は、障がい児学校では「障害児の早期介入についてのトレーニング研修会（The Training Course of Early Intervention for Children with Disability in Ben Tre Province August 1- 4th 2017）」が行われた。これはSVCAが教育研修局や保健局に働きかけ、障害児にかかわる多くの支援者に対して研修などの機会を与えることを目的として計画したためであった。研修のテーマは「自閉症とADHD」、「統合保育」、「CBR」、「言語指導」、「保護者の立場」、「発達検査」など多岐にわたるが、ここでは筆者らの担当した「自閉症とADHD」、「発達検査」について報告する。

日本では2005年に発達障害者支援法が施行され、自閉症やADHDなどの発達障害が支援の対象となったが、ベトナムでは発達障害児への支援は明文化されていないようである。ベンチェでも、知的障害児については学校や支援センターも建設され、一定の理解と支援が行われるようになった。しかし、発達障害についてはこれからの課題ということで講演の要請があった。そこで、「自閉症・ADHD」について、ベンチェの支援学校の教員、行政のCBR担当者、保健局の職員などを対象に、その特徴、診断基準、関わる時の対応の基本などの内容を中心に2回に分けて話した。講演の後、知的な遅れはないが社会性や行動の発達にアンバランスのある子どもたちはいますかと質問すると、多くの人が手を挙げていた。また、いつもエネルギーで元気な通訳さんも「私も何か持っているようですね」と話したので「そうかもしれません、実は私もそうなのです」と答えた。

また、ベトナムでは発達のアセスメントや診断に際

して、欧米からの質問紙を用いて評価することが多く、自国で標準化された検査はないということであった。そこで、日本で広く用いられている新版K式発達検査の用具を持参し、その構成、検査方法などについて説明し、日本の子どもの検査場面のビデオを見てもらった。その後、ベンチュの自閉症の子どもに通訳を通して検査を行い、教員や教育局の人々に窓越しに観察してもらった。この研修を受けた人たちは興味を持ったようで後の質問の中で、自分たちもこのような検査ができるように指導して欲しいとの要請もあった。持参した検査用具は寄付してきたので少しなじんでもらい、機会があれば講習会もやってみたいと考えている。

3.4 障がい児学校でのお祭り

障がい児学校にはダウン症などの知的障害や自閉症の子どもを中心に200人が在籍し、遠方からの生徒は寄宿舎に入っていた。お祭りは、その障がい児学校の校舎内で行なわれた。実施に当たって、楽しく過ごすという目的の他に、活動を通して教育的な面も配慮し、対象児にとって適切な活動を行うことや、お祭りの出し物をベトナム人と日本人が共同作業していくことで協働という視点を育てていくという目的も含まれていた。出し物は、ダンス・けん玉・ボーリング・輪投げ・宝さがし・的入れのあて・すごろく・魚釣りゲームは、日本人チームが担当し、ベトナムのお好み焼き（パインセオ）・ベトナムの伝統的なお菓子・ベトナムの伝統的な遊びは現地のベトナム人チームが担当した（図3）。



図3. お祭りのあとの氣勢

筆者らが担当した魚釣りゲームについて述べると、会場の障がい児学校の児童・生徒と周辺の学校の生徒の総計約120名が来校すると想定されたので、120匹の魚と魚の釣り竿の用意が必要と計算された。筆記用具類は日本から持参したが、材料はベトナムで手に入る現地での調達であるため、担当者3名で魚の釣り竿

の調達から始めた。幸い宿泊したホテルの近くに市場があり木製の棒を10本購入できた。問題は120匹の魚を用意できるかが懸念された。魚の半数近くは日本人が各自のスケジュールの合間の夜間に作成したが、残りの半数は魚の型紙を作っていき絵の作成は未完であった。担当者で相談して、当日の午前中に参加している現地の教員やスタッフに協力を依頼することにした。当日は、雨季であるが天気は晴れていた。しかし、準備を始めると南方独特のスコール（激しい降雨）があり、当初予定していた開放的な廊下から室内での実施を余儀なくされた。移動の傍ら、室内で20人位の現地の教員・スタッフに依頼して魚の絵を描く作業が進んでいった。流石に現地の教員・スタッフともに絵を描くことに協力的で、日本人スタッフと共に協業した。目的に向かい協力できたことは有意義であった。

魚釣りをした子どもは、ルールを知る、順番を待つなどの社会性の獲得といった点からも活動の意義はあったと思われた。子どもたちは終始楽しそうにしていたのが印象的であった。このような子ども中心の活動は、現地ではあまり企画・実践されないとも聞き及んでいる。この点からもお祭りの開催の意味はあったと考えている。

4. CBR

4.1 CBRについて

SVCAの活動ではCBRということばがよく出てくるので少し説明したい。1980年代からWHOが開発して取り組んできた政策であり、地域に根ざしたりハビリテーションと訳されている。地域社会にある既存のさまざまな資源を活用したサービスの提供の改善により、途上国に住む障害のある人と家族の生活を向上させようとする方略である^[2]。

先進国においては、障害を心身の機能不全と捉えて、当事者の心身の機能回復を念頭に医療・福祉等の機関あるいは在宅障害児・者に専門的教育を受けた有資格者であるリハビリテーション関連専門家が治療・訓練を推進してきた歴史がある。しかしながら、発展途上の国は、一般に経済発展・開発が先進国に比較して低く、貧困や人口問題をなど多様な面で負担を強いられているために同じようにはできない。ベトナムも都市部に医療機関が集中することで、地方や農村部にまでリハビリテーションサービスが行き届かないという不利益を被っており、障害児・者の問題は社会問題として顕在化していた。そこで、問題を解決するため地域社会に根ざしたCBRの考えを基にその活動の転換を図っている。すなわち、対象個人の治療・訓練のみな

らず、当事者・家族を含めた地域社会の開発を目指し、地域の人々の参加を促し、障害児・者の問題解決のプロセスを通じて、地域社会の発展・開発を図ることが CBR の目標になる。SVCA の活動の目的も地域の資源を活用してリハビリテーションの定着を目指すという点で CBR の理念に沿った活動である。

4.2 ベンチェ省における CBR

今回の障がい児学校で行われた研修会の中では、ベンチェにおける CBR の歴史や現在の課題についての発表も現地の CBR 担当者からなされたので内容を以下に示す。

1997 年にベンチェ省で CBR 活動が始まり障害児の多くがその対象になった。CBR 活動の対象は運動、知的、学習、精神などの障害者であり、CBL に関わるワーカーは 900 人を数えるという。また、活動とともに、社会の関心、一般の人の知識、内外のボランティア団体の支援なども広がってきた。

CBR 活動を行ってきた結果よかったこととして、1) 障害児やその家族が行政に関心を持ってもらうことができたこと、2) 障害者を地元の人に納得して理解してもらうことができたこと、3) 病院や障がい児学校にサポートしてもらうことができるようになったこと、などが挙げられた。一方、CBR の現状の問題点として、1) CBR 活動は制限が大きいこと、2) 経済的支援が十分でないこと、3) 村のリハビリテーションでは専門家が少なくあまり効果がないこと、4) 障害者の自立にまで至らないこと、5) 専門家の人材が足りない上に、担当者が変わることで、などが挙げられ、様々な解決方法が模索されていた。今後に向けての CBR の新しいテキスト（手帳）の作成も SVCA が現在取り組んでいる課題である。

5. ベトナムのまちあれこれ

5.1 市場（ベンチェ）

ベンチェの人々は朝が早く夜の帳が残っている 5 時から活動を始める。市場に行くと、すでに店は開いていてたくさんの人々がテーブルを囲んでコーヒーやジュースを飲んだり話をしたりしていた。市場の中に入ると、さまざまな食べ物に出くわした。肉や魚に混じって、カエル・ヘビ・トカゲなどである（図 4）。そういえば、魚はナマズがおいしいそうで体長 2m になるものもいるという話を聞いた。また、ナマズはメコン川での養殖も盛んで、日本やアメリカにも輸出され、有名なチェーン店にフィッシュバーガーとして売られているということであった。



図 4. 早朝の市場

5.2 町の交通バイク

ベトナムでは、道路という道路で多くのバイクが走っていて、仕事や子どもの学校への送り迎えに使われていた（図 5）。ホーチミン市では人口の半分の 500 万台のバイクが走っているそうである。はじめ数人で乗っているのを見かけ驚いたが。大人 2 人と子ども 2 人の計 4 人までが法律で許されている乗車定員で、時には 5、6 人乗りも見かけた。子どもに障害がある場合は親の一人が抱きかかえ、家族総出で学校や病院に通っているという。



図 5. バイクで出勤

5.3 食べ物

食事はたくさんの種類の野菜や果物、そして、コーヒーやフランスパンの朝食も美味しかった。また、フォーなどの麺類、魚、肉とも種類が豊富で、から揚げや煮魚・鍋などもよく食べた。ビールも毎晩いただき、日本に帰ってきたときは少し体重が増えていた。



図6. 昼食の生春巻き

5.4 戦争博物館（ホーチミン）

帰国の日、ホーチミン市で生春巻き（図6）やうどんの昼食を食べた後、戦争博物館に向かった。そこは膨大な量のベトナム戦争の写真が展示してあった。大きなテーマとしては、戦争の悲惨な様子と、全世界の支援者への感謝が見て取れた。日本のベ兵連の展示コーナーもあり、同時代を過ごした私としては感慨深かった（図7）。



図7. 枯葉剤により葉がなくなった樹木の写真

6. おわりに

ベトナムを歩くと、道路はバイクや自転車が多く、町の様子は20～30年前の日本を思わせるものであった。また、市場や家庭訪問などからは、生活の貧しさや資源の貧困さを感じるが多かった。しかし、人々のわれわれに対する表情や障害のある子どもへの関わりを見ると、素朴な温かさが感じられた。そして、障がい児学校の講堂の正面横に「障害者を支援すること

は、社会全体の責任です」との大きな看板が掲げられており、ベトナム人の誇りのようなものを感じた。

家庭訪問は、SVCAの種々の専門家にベンチェの専門家や現地のCBRワーカーが加わって、多様な視点からのアプローチと助言や指導が一人ひとりの障害のある子どもとその家族に行われた。このような多職種連携による支援は、わが国でもほとんど行われていない。ベトナムのベンチェにおける国際的支援だからこそ可能なことかもしれないが、とてもすばらしいシステムだと思われた。

帰国前日には、ベンチェ省の副知事、保健局長や教育局長、病院や障がい児学校の管理職の人々に対し、今年度実践した研修や支援の内容、反応、感想などが、SVCAから報告された。そしてこれから1年かけて、SVCAとベンチェが協議して来年の夏の計画をつくっていくという。その中で、SVCA側から支援学級や通級の設置の提案がなされたが、先に述べた田舎に住んでいて障がい児学校に通えない障害児にとっては、とてもよい案と思われた。

SVCAの基本理念は、常時その地にいない私達「外国人」が「何か」をするのではなく、常時そこにいる現地の人が「何か」をできるように、共に考えサポートする活動であるという。したがって1) 現地の当事者と関係者の意識・知識・技術を高める支援、2) 単に医療モデルのみならず社会モデル的支援、3) 省の行政関係者には、現地の支援者が長期間にわたり利用可能なシステムの構築を推奨（社会資源開発）すること、4) CBRワーカーや、実際に行っている現地スタッフの人々の日々の実践を尊重し、丁寧に対応すること（相手の日々の実践に対して否定的な発言は避ける）、5) 現地の人たちが自らその問題点を発見されるような道筋を考えるきっかけを作るのは、少し離れた視点でみられる「外国から来た訪問者」である私達の役割、などである。筆者らは初めての参加ではあったが7月30日から8月6日までの短期間の経験を通して、SVCAの基本理念を学ぶ機会であったと考えている。最後に、SVCAのこれからの発展を期待して、本稿を終えたい。

7. 文 献

- [1] ベトナムの子どもたちを支援する会ホームページ, <http://space.geocities.jp/svca84/> (2017.11.2)
- [2] E. ヘランダー：偏見と尊厳, 田研出版 (1996)